

九州国立博物館

所在地 福岡県太宰府市石坂4-7-2

設置者 国(独立行政法人)

指定施設／歴史博物館



DATA

視覚障害者向け観覧ツアー

2019年度実施

鑑賞

閉館後に、展示室を明るくして特別展を案内して観て回る、観覧ツアーとして開始。触ることのできる展示作品のレプリカ、点字の解説などを準備した。その後、文化財保護のための工夫が凝らされた建物の構造や、博物館の役割を知ってもらうための「視覚障害者向けバックヤードツアー」(2022年度から実施)、手話通訳・要約字幕付きの「模型de博物館たんけん隊」(2022年度から実施)にもつながる。

「ならべてわかる“本物のひみつ”」
「さわって体験“本物のひみつ”」

2020年度から継続事業

鑑賞

実物とレプリカを並べて展示し、実物を見ながらレプリカに触れることで作品の新たな魅力を発見してもらう「ならべてわかる“本物のひみつ”」。2023年度は「さわって体験“本物のひみつ”」として展開。展示作品のレプリカや模型に触って、重さや形を感じたり、音を鳴らしたりすることができ、解説や案内を自動音声で聞くことができるスマートフォンアプリ「ナビレンス」や、展示室内の触知図も用意されている。関連イベントとして、手話通訳付きミュージアムトークや、視覚障害者とともにつくる対話型鑑賞会等も行う。

その他の取組

文化交流展示室(常設展示室)のバリアフリー化(点字解説、自動音声システム「ナビレンス」、触知図、手話解説動画)、視覚障害者向けガムランワークショップ、手話通訳付きミュージアムトーク・バックヤードツアー、やさしい日本語での博物館見学など。

取材日 2023年12月18日

回答者 西島亜木子(九州国立博物館 企画課主任研究員)
加藤小夜子(九州国立博物館 展示課主任研究員)
今井涼子(九州国立博物館 交流課主任研究員)



視覚障害者向け観覧ツアー



これらの事業に取り組むことになった
きっかけを教えてください。

2019年に台湾で行われたアクセシビリティのシンポジウムで、館職員が発表する機会がありました。シンポジウムの後に、台中にある国立美術館で行っている視覚障害者向けのプログラムを視察したのです。そこで、当事者のみなさんが心から楽しんで生き生きした表情で帰られるのを見て、私たちは今までそうしたプログラムを全くやっていなかったことに気づき、なんて日本は遅れているんだろうと感じました。それが最大のモチベーションとなり、帰国後すぐに動き出して実現したのが、閉館後に展示室を明るくして行う視覚障害者向けの観覧ツアーでした。

振り返ってみると、この2019年が、九州国立博物館にとっての障害者対応元年だったと言えると思います。よりよい障害者対応ができないかの検討や、「ならべてわかる“本物のひみつ”」展の企画がなされていた時期でもありました。同時多発的な動きが始まった年であったと思います。職員も皆それぞれにインクルーシブな取り組みに関心を持ちつつも「どうしたらいいのかわからない」と思っていたところに、「視覚障害者向け観覧ツアー」が立ち上がり、始めるんだったら一緒にやってみよう、という職員が10人近く集まって手伝ってくれました。

一方で「模型 de 博物館たんけん隊」は、当館を共同運営している福岡県重点政策「障害のある方の博物館体験促進事業」（2022年から3年間）をきっかけに始まった事業です。事業の実施までには時間的余裕がなかったため、あまり準備時間をかけずにできることをと考え、視覚障害者の方にも当館の建物の構造を理解してもらうために作っていた模型を活用しようということになりました。この模型は元々、博物館の建物の構造を含めて、文化財を守るための工夫をお伝えするバックヤードツアーのために作ったものでした。ツアーはぐるぐる見て回りはするけれども触れないし、視覚障害者のみなさんには建物の形すらわからないということで「模型 de 博物館たんけん隊」は、模型を触って理解してもらえるように解説を作りました。博物館自体がとにかく大きく、中に入ってしまうと建物全体の構造がなかなかわからないので、模型での説明は見える人にとってもすごくわかりやすいという気づきもありました。

「視覚障害者向け観覧ツアー」について、 どのようなプロセスで企画、実施をしましたか？

視覚障害の方についての情報は一切持っていなかったもので、まず、太宰府市や福岡市の視覚障害者団体の方に、ヒアリングをさせてほしいというお



三国志展で出展された作品のレプリカに触る参加者

願いをしました。聞きに行ってみると、「そもそも博物館には行きません」「自分たちが行ける場所だと思っていなかった」と言われて、私たちの方が障害をつくっていたことを思い知って、大きなショックを受けました。「博物館は暗いし、人も多く、ぶつかったら怖いから行きません」ということでした。そこで、どんな場所だったら来たいと思うか尋ねていくと、人や作品にぶつかったりする危険性がない、明るい環境で安心して観たい、触れるものがあるといい、あとは人に説明してもらいたい、といった意見が出てきましたので、閉館後に展示室を明るくして行う観覧ツアーの形になっていきました。

触れるものについては、当時の教育普及担当の3人の職員ですべて手作りました。たまたま美術系の大学を出ていたり器用なメンバーだったため、外部に発注せず、立体コピー機なども使って作っていきました。はじめは3、4点の模型を自作したのですが、実際にツアーを行ってみると、みなさんにとっては触ることが鑑賞なので、参加人数に対して触れるレプリカの種類も、模型の数も足りませんでした。また特別展の際に行ったために、せっかく模型を作っても、特別展の期間中しか活用できないというのも反省点でした。

「ならべてわかる“本物のひみつ”」
「さわって体験“本物のひみつ”」

「ならべてわかる“本物のひみつ”」について、
その経緯や実施のプロセスなどを教えてください。

博学連携の推進のため小学校・中学校・高校から一人ずつ当館に出向している職員がおります。その職員が特別支援学校や視覚障害者団体に対応していたのですが、事前に申込みのある場合のみレプリカや模型の体験を行っていました。そこで、いつでも誰でも鑑賞を楽しめる博物館として、ふさわしい企画を探っていました。

この企画の趣旨として一番伝えたいのは、「障害のある方にも楽しんでもらえる」という視点ではなく、「多様な方からヒアリングした楽しみ方を展示に活かす」という視点で発想していることです。そう考えるようになったきっかけは、全盲と弱視の方をご案内し、展示室内でレプリカを使った簡単なツアーを行ったときのことです。その際縄文土器を代表する火焰型土器のレプリカを準備していました。私たちはどうしても外側の装飾に目がいってしまうのですが、全盲の方が最初に中に手をを入れて、深さや大きさを確認されたのです。それまで、この土器の中に何を入れるのか、中はどうなっているのか、といった視点がなかったことに気づいて、“本物のひみつ”の展示では「あなたなら何を入れる?」といった発想を促すような楽しみ方のヒントを付けました。いろいろな方から楽しみ方のヒントをもらって、それを展示で伝えていきたい、その結果、子どもも含め誰もが楽しめる展示につながっていくのではないかと考えました。

“本物のひみつ”の展示を考える際、まずは館内にあるもので何が活用で



「ならべてわかる“本物のひみつ”」チラシ

きるかをリサーチします。当館では3Dプリンターを使って調査研究していますので、過去に作ったものなども活用します。予算を検討して、レプリカや模型を作ることもあります。4年前に重要文化財の鬼瓦のレプリカを作ったのですが、コロナの最初の年であつたため、触ることができませんでした。けれども、視覚障害者団体の方へのヒアリングで、「鬼瓦のような顔を自分でやってみたらイメージがしやすいのではないか」というアドバイスをいただきました。そこで、「鬼瓦のような、人々を守る勇ましい表情をやってみよう」と体験を促し展示を楽しんでもらう工夫をしました。

実施するに当たり苦労した点や、 進めていくうちに工夫が必要になった点がありますか。

触知図や点字の解説をつくる過程で、限られた文字数でわかりやすい情報量に整理していくのが難しかったです。これについては、点字図書館や視覚障害者の支援センターの方、また福岡市在住のユニバーサルコンサルタントの方に多くを教えていただきました。触知図も、こちらが考えている以上にシンプルにしないと伝わりにくいことが、何度も試作品を作ってヒアリングする過程でわかってきました。展示室の広さがどれぐらいなのか、いくつ作品があるのか、どう回ったら全部体験できるのか、次に何が来るかというドキドキ感も楽しいけれど、中には事前に作品の配置がわかり頭の中でメンタルマップを作っておいた方が安心して楽しめる人もいとアドバイスいただきました。製作を依頼した業者は、駅の点字案内などを製作している会社で、一つ一つ、記号の質感等も工夫していただきました。

点字の文字数に制限があるため、その中で作品を解説するには、担当研究員の協力も必要でした。また、当館ボランティアによる解説の手話動画も制作したのですが、元の解説文をそのまま手話にしようとすると、手話の動きから別の意味やニュアンスが入ることもあり、専門用語の表し方や作品に対する共通理解のため、担当研究員と手話ボランティアの勉強会を行う必要がありました。

またひとつの工夫として、特定の誰かがいないと成立しないという状態は避けるようにしてきたところがあります。これは、コロナ禍においてあらゆる職員の間に「できることはやろう」という雰囲気が生まれ、さまざまな職員が関わって手話通訳付きオンラインバックヤードツアーを実施してきた経験も大きいと思います。現在でも、この日にイベントをやると決まったら、都合のつきそうな人に声をかければメンバーが集まるような体制になっています。一



点字解説を読む参加者

から趣旨や意義を説明しなくても、当日の実施メンバーになってくれる職員がたくさんいるのです。そうしたコロナ禍での経験や、展示のユニバーサル化の過程でたくさんの研究員と話をしてきたことが、現在につながっていると思います。

事業を実施してみてもの気づき、 想定外の反応などがありますか？

はじめに行った視覚障害者向けの観覧ツアーは、閉館後の夜の時間帯に実施したので、昼間も開催してほしいという声がありました。これは、視覚障害者のアテンドをされる方が異性の場合、夜の時間帯に異性の同伴者に依頼するのは気が引けるということでした。こういうことは、実際にやってみないと気がつかなかったことでした。

また、実施後の反応としては、「やってくれてありがとう」、「こういう機会があっ

てよかった」など、博物館がこういう取組をしたということや、博物館に初めて来る機会ができたということに対する反応が大部分でした。逆に言うと、中身に関してはまだまだ触れられていませんでした。例えば手話通訳付きミュージアムトークを実施した際に、質問に対する学芸員の答えを手話通訳で拾いきれず、「何か言っているみたいだけれどわからない」と思われた場面があったそうです。そのことについて、手話通訳者に対しては本音をこぼしておられたことを、私たちは後で知りました。あまり厳しい意見を言って、せっかくの機会がなくなってしまうと心配して、私たちに直接伝えることを遠慮していらっしやったのかもしれません。こちらも、相手が聞こえていないという状況を本当に理解するのに、少し時間がかかっているところもあります。ですから、「本当のところはどうなの？」というところを、当事者の方と一緒に考えていく必要があると感じました。

また、どの事業にも言えますが、広報の手法自体がとても難しいと感じています。視覚障害者向けのガムランワークショップを行った際、点字や音声コード付きのチラシを作成して視覚障害者団体や近隣の特別支援学校の生徒に一人一枚いきわたるように配りました。しかし、その後3週間くらいは申し込みがなく、視覚障害者団体のメーリングリストに情報を流してもらった途端に、すぐに定員が埋まりました。チラシはデザインや内容、白黒反転などの工夫をし、時間と労力をかけて作成したのですが、やはり福祉業界のルートや口コミなど、当事者のコミュニティと近くなることが一番だと感じました。聴覚障害者の場合も、同じようなことがあると思います。

嬉しい反応としては、4年目になる“本物のひみつ”シリーズについて「触れる展示はどこでやっていますか？」とチケット売り場で聞いてくださる方がいたり、視覚障害者団体が、「せっかくならこの企画中に来たい」と言ってくれたことです。これまでは小さな展示室での企画でしたが、少しずつ認知されるようになってきたこともあって、来年は特集展示として行うことになりました。

広い展示室でできることになったので、ゆったりと体験を楽しんでいただき、これまでとれていなかったアンケートなどで、しっかり感想や反応を拾えるようにしたいと考えています。



事業を行うなかで、見えてきた課題はありますか。

やはり当事者の声なしで企画をつくるのは当事者のためにはならない、ということを痛感しています。何を要望されているのかということやその背景にある相手の事情もわからないことが多いので、企画をつくるプロセスからインクルーシブにしていくのが成功の秘訣ではないかと思います。

視覚障害者向けの観覧ツアーも、ヒアリングはたくさん行いましたが、当事者と一緒に作ったというわけではありません。今後の事業に関しては、積極的にいろいろな当事者に話を聞きながら、一緒に作りあげていきたいと思っています。聴覚障害者向けの事業も、これまで手話通訳ボランティアの方々を通して教えていただき企画を試行錯誤してきました。もうそろそろ聴覚障害者の当事者と直接お話をして、当事者は本当はどう感じているのか、というところをしっかりと検証したいと思っています。

実は、インクルーシブな取組について、館全体のはっきりした方針はないのです。それぞれが勝手にやってみて、どんどん既成事実化していく作戦と言えるかもしれません。今お話ししている3人も「障害者対応担当」というわけではありません。私たち以外の職員も、それぞれが担当している業務と結びつく形で、障害者対応業務を行なっています。ただそれが、担当が変わっても次に引き継がれるかと考えると、やはりちゃんと後継者を育てておかないと、なかなか続かないかもしれません。そのあたりは課題に感じています。

それから視覚聴覚以外の障害者の方についても、私たちが気づいていなかっただけで、お出かけ先のひとつとして九博に行ってみたいという声が増えてきました。ただ、こちらがまだ何も準備ができていないので、発達障害者

対応やユニバーサル・ミュージアムの研修会に参加したり、大学の先生から教えていただいたりと、少しずつ勉強を始めているところです。

その他の取組

こうした取組を続けてきて、 職員の意識の変化などありましたか。

今3人が担当している事業の他に、音声ガイドアプリ「ナビレンス」を導入するための開発チームができました。また、文化交流展示室（常設展示室）のユニバーサル化で触知図などを担当するチームも別にあります。そうしたチームで、みんなで一緒に当事者にヒアリングに行ったり、当事者に館に来てもらって意見を聞いたりするなかで、だんだんと多くの職員が直に当事者と関わるようになってきました。そうするうちに、さまざまな課の職員それぞれがユニバーサル化を自分事として捉えるようになったのが、大きな変化だったと感じています。

例えば、2025年が当館の20周年ということで、常設展や特別展の内容や、施設の改善を検討するワーキンググループが動き始めています。その各グループのなかに、意図的ではないのですが、ユニバーサル化の事業を担当してきた職員が入っています。障害のある人が来ることを前提とした発言をする職員がグループのなかにいることで、他のメンバーも自分たちの仕事のなかに、そうした視点を取り入れられるようになってきたと感じています。

ユニバーサル化の取組を進めるにあたり、 どんなことが大事だと思われますか。

当事者やご家族、支援者とお話するなかで、特別支援学校の教育では「いかに安定した生活を送れるようになるか」ということに力点が置かれているという意見を耳にすることがありました。知識をつける、学ぶというよりは、どちらかというと職業訓練的な側面がとても強いということです。そんななかで、余暇を過ごすとか、レジャーを楽しむという発想自体があまり日常的ではないということです。博物館や美術館は聞こえる人たち・見える人たちが行くところ、文化が違うところといった意識もありますし、そこに出掛けて行って何かを鑑賞するというのが、自分たちの余暇活動の選択肢にはない、という話も聞きました。

先ほどの話にもありましたが、実施後のアンケートをとると、評価は高いのですが意見や改善点を書いてくれることはほとんどありません。その企画が彼らにとって本当に良かったかどうかを知るためには、当事者のみなさんと仲良くなるまで付き合わないと難しいと思います。こちらが本気でやるという姿勢をわかってもらえないと、相手も本気で付き合ってくれませんから、途中で止めてしまったら、ポーズだけだったと思われて当然です。聴覚障害者向けバックヤードツアーも、毎年実施時期を変えるのではなく3月の頭にやることにしています。「この時期に九博ではいつもこれをやっている」という認識が広まることも大事だからです。そうやって、障害のある人の地域での活動範囲のなかに、徐々に当館も入ってくるように人々の認知が広がっていけばよいと思います。